〔難經〕漢方の醫書である。王翰林集註、宋王維一撰のものに我が慶安五年の刊本がある。

＊なんきん 南京のはち匁から九匁を、（博多） 氷突出す染つけの南京すずし錫の皿（會稽山）

「南京のはち」とあるは、南京の鉢（嬉遊笑覽云「南京燒は慶長年中より渡る」）に八匁をいひかけた。「かたじゆけ云々」の條をも對照せよ。ここの文意は、支那南京燒の鉢は貴重な物なれども、八匁九匁の捨賣にするのである。「南京生絹」は生絹に涼しをきかせ、錫と頭韻の文飾に用ゐたまでである。

なんぜい 惟茂弓矢の法を知らぬとは尤も和主に似合たる難勢（絶籌）

〔難勢〕むづかしい言掛り。法華文句記・十に、「廣ニ難勢一、不ニ越ニ先規一」、とありて難問する氣勢の義である。

＊なんだ 爰は蛭子の御社、御誕生の折柄に難陀が口よりあつ湯を出し、跋陀が口より溫湯を出し産湯をひかせ（烏帽子折） 難陀跋陀の二龍王雲を凌ぎて天降り、口より溫湯熱湯を吐き産湯を灑ぎ奉ろ（鞠迦）

〔難陀〕梵語 Nanda. 龍王の名である。法華經・序品に、「有ニ八龍王一、難陀龍王、跋難陀龍王云云」、とありて科註に、「難陀此云ニ歡喜一、跋此云ニ善、卽兄弟二龍、常懸ニ塵竭提一、雨澤以レ時、國無ニ飢年一」。

＊なんてふ 義朝陣頭に進んで、何條弟の八郎め（鎌田） 牛若はつと肝にしみ、なんでふ母を引渡させ罪科に遭はせ置くべきか（孕常盤）

「なにてふ」（何云）の詰つた語で、「何といふ」の義である。多く當字に何條と書けども、何條は「なんでう」で假名遣が違つてゐる。伊勢物語に、「世の憂き事どよをになるてふ」、とある「てふ」はここにいふ「でふ」と同じものである。

＊なんてやる 人呼びまはつて何でやる（丹波與作）

「なんである」の訛。何用であるか。

なんてん 〔南殿〕「なでん」とよむのが故實である。「なでん」を見よ。

南天と大蒜（なんてんにんにく） 軒を打越す細紐に結下げし水仙一本、行當りびつくりし、コリヤ何ぢや厄病の呪か、但し洛中物騷の盜賊のまじなひか、病除の爲ならば南天と大蒜を吊はず、アア開えた（閑八州）

戶上に南天と大蒜を吊すは病除の呪禁である。夜光璧・中之卷に、「南天と蒜を戶上に懸くるは本草綱目に、大蒜は鬼を殺し邪氣を去るとあればなり、南天燭は筋を強くし氣力を益し、身を輕くし年を長くし老を却くるとありて、其外功能多く德すぐれたるものなれば、蒜にならべてかくると見えたり」。ここの文意は、「病除の爲ならば南天と大蒜を懸けるべきに、水仙一本吊すとは扨何のわけやら」といふのである。

なんどり 「つい・なんどり」を見よ。

なんばうけぬき 一度に群り來る所を引寄せ引寄せ首すつほり、蹈付けてはほんと拔き、南方毛拔釘貫まさりの二人が手さき（閑八州）

〔南方毛拔〕名古屋より製出する鎹（けぬき）の稱。諸葛亮の後出師表に、「思ニ惟北征一、宜ニ先入ニ南、故五月渡ニ瀘、深入ニ不毛一」とある中の「南」と「不毛」とをきかせていつた洒落詞の其名稱となつたのである。本朝世事談綺・器用部に、「尾州名護屋の產也、南方の名は近衞殿のつけさせられしといふ、孔明が出師の表に、深く不毛に入り今南方已定、甲兵足れりの心也と云云」。吉田藤助撰・古渡記に、「鎹（けぬき）南方名物なり、南方尾州產、足利義教公富士御覽之時熱田圓福寺に止宿ありしに、古渡の鍛冶鎹を奉りしが、なんぼうよきけぬきなりと仰せられしより、家號とせしよし」。

難波の祖師（なんばそし） 難波の祖師の名號、探幽の觀世音（三世相）

難波御堂の祖師教如上人のことである。「難波の祖師教如上人」は教如上人自筆の名號（卽ち南無阿彌陀佛）をいふのである。難波御堂は大阪東區北久太郎町四丁目にありて、裏御堂又は南御堂とも稱す、慶長年間大谷本願寺派の教祖教如上人本寺を創立し、本尊は安阿彌作の阿彌陀佛であつて、現に同派屈指の名刹である。教如上人自筆の名號は信徒の尊崇厚く、隨喜の涙を流す物品である。

なんばやき 「なにはやき」を見よ。

なんばん 紅絹裏に源氏雲の裾ぐくみ、南蠻ごころの大小・對の金鍔（反魂香） 本國長崎に黃陳といふ南蠻外科（藤壓歌） この膏藥では手負は癒らず、南蠻流に人の油、うぬめは油がありさうな（松風）

〔南蠻〕往時南洋諸島を經て來朝した西洋人、殊に葡萄牙人・西班牙人を稱した。

「南蠻ごころ」は南蠻（ごろふくれん）吳羅服連の略、吳羅服連は繭語（Grof grein. の訛、駱駝の毛織物であつたが、後には羊毛又は綿麻を交へて織り、平織も綾織もある。南蠻流來の吳羅服連の文に似た鮫鞘をいふ。

「南蠻外科」とは西洋外科醫術をいふ。「南蠻流」とは南蠻外科醫の治療法をいふ。黑川道祐撰・雍州府志・貞享三年刊）六に、「凡本朝外科有ニ兩流一、一本朝所ニ傳來一也、一傳ニ西洋耶蘇治療之法一、治ニ纏瘍并金瘡一、是謂ニ南蠻流一、今以ニ斯傳一爲ニ良」。

＊なんぼ ただゆかしいは父樣母樣、なんぼ思ひあきらめてもあひたうござる（大經師） よしない手形なんぼう後悔仕る（歌念佛）

「なにほど」（何程）の略轉。延べて「なんぼう」ともいふ。どんなに。いかに。謠曲・隅田川に、「なんぼう世には情なき者の候ぞ」。同・鉢の木に、「なんぼう無念のことざふぞ」。

南面の位（なんめんくらゐ） 君を南面の位に卽け（井筒）

天子の位をいふ。易繫辭下傳に、「聖人南面而聽ニ天下一、嚮ニ明而治」。

に

にあがり よその哀れを身の上に、思ひしらべの絲よりも、心は二あがり三下り、撥もしどろに彈きなせり（女夫池）

〔二上り〕三味線の彈き方、本調子よりも二の絲の調子を高くするもの。

＊にえる 念者坊の袖辨樣は蹈殺すとてにえさつしやる（萬年草） 勝次郎は追放で八幡はにえる（淀鯉）

〔煮〕沸立つ義。腹立の焰をもやす。騷き立て

る。矛里靴行脚（正徳六年刊）四之巻に、「八兵衛どの猫またが出をつたとにえかへる」。

にきたへ　和栲の御衣（振袖始）

〔和栲〕細密な織り布で、多くは栲の木の皮の繊維で織つたもので、「あらたへ」の對語。「天照大神に奉る云々」を見よ。

にくけい　「につけい」を見よ。

にくぞう　この老嫗の鼻の先の走り智恵、悪そういひたる舌ただれ（閑八州）

憎憎（にくらしい事）。にくみきらふこと。悪口。現今熊本地方で「にくじ」「にくじゅう」「にくぞ」「にくぞう」という用ゐてゐる。按じるに、憎悪に悪憎というもので、無慙を慙無い（その條を見よ）といへる類である。

二月堂の牛王　胴の中を空虚にくつて、二月堂の牛王とお伊勢様のお秡入るやうにとの誂へ（薩摩歌）

奈良の東大寺二月堂より配布した牛王（その條を見よ）の守札をいひ、札の面に「南無頂上佛面除疾病　二月堂　南無最上佛面顧満足」と捺印してある。菱河師宣撰・和國名所鑑（元禄九年刊）下巻に、「奈良は昔の京にして古跡多し、ここに二月堂とて、年毎に一度二月におこなひして牛王のまぶりを出す所なり、堂の前に池のあとあり、常に水なし、祈禱の後此池あとに立寄、加持をしてわかさわかさと呼び給へば、そのまま水わき出る、その水にてこの牛王捺し出す、諸國にわたつて遍く災難除きし守となつて、人これをもちゆるなり、さる所に死蠱の下女夜な夜な來りて、主人の本妻をねらふ也、然れども此二月堂の牛王を身に離さず守りにかけし故、取殺す事能はず、或時女房湯殿に入て湯を浴びしに、彼の下女が死霊來つて、我を殺せし報いに其方が命取りぬとて、飛掛り食殺ししとなり、これ二月堂の牛王を纏はざる故なり、かかるたつとき不思議の牛王を疎かにすべからずとてに、今たつとみし也」。

***にさい**　ヤア二歳め、ぶたれて居ようかと、ぶちかくる（生玉）

〔二才〕書二才などいふ二才で、未熟の意。よつてもつて人を罵つていふ。弱輩。

***にさう**　景清は二相を悟り候へども、重忠は四相を悟る（田世景清）

〔二相〕我相と人相。

にざう　「鍛冶屋の仁藏」を見よ。

にし　これさにし達、物さ問ひ申すべい（碁盤大平記）

「ぬし」（主）の轉訛。對稱代名詞。あなた。俚言集覽に、「物類稱呼に、他を指して上總にてはニシといふ、移山案、主といふの訛言也」。

***にじ**　二字を首に懸けたる侍の役なれば（今川了俊）　二字を首に懸けたる森右衛門（女殺）

〔二字〕武士をいふ。武士は通稱の外に二字の實名を有すればかくいふ。

永井正流撰・本朝道千鳥（寶永四年刊）一之巻に、「我親里を語りけるは、生國は作州津山何がしとて二字も名乗り、高禄を得られしも我九つの時までなり」。「二字を首に懸く」とは、武士たるを保有してゐるをいふ。能狂言・鶯猿に「名字をも首にかけた者が禮までいうた」とあるも、立派な姓名ある者が禮までいうたとの意。

***にしきぎ**　奥州の錦木・しのぶすり、いづれ奥は戀所（源義經）　韓紅の錦木や枝珊瑚樹と燒付きたり（淀鯉）

〔錦木〕陸奥國希婦の里の名物で、五色に彩つた一尺ばかりの木。昔時男が逢はうと思ふ女の家の戸口にこの木を立つ、女が靡けばこの木を取入れる、女が靡かないで取入れぬ時は、男は次々立て加へて千束を限りとして、女の同意を求めるといふ。謡曲・錦木に、「是は錦木とて色どり飾れる木なり、いづれもいづれも當所の名物なり、……陸奥のしのぶもぢずり誰故に、亂れそめにし我からと、……昔より此所の習ひにて、男女の媒には此錦木を作り、女の家の門に立つるしるしの木なれば、美しく色どり飾りて之を錦木と云ふ、さる程に逢ふべき男の錦木をば取入れ、逢ふまじきをば取入れねば、或は百夜三年までも立ちしによつて千束とも謡めり」。

錦手　濃茶茶碗屋嘉平次は嵯峨が情の錦手に染付けられて（生玉）

彩色模様を描いた磁器。ここの文は茶碗屋の縁語錦手をいうて、遊女嵯峨の色たつぷりの手管の意にいひなしたのである。

にじふどう　されば六道四生二十五有のその中に人よりも尊きなく（蟬丸）　三乘五乘七方便四種八部二十五有普く利益の甘露を嘗め（釋迦）

〔二十五有〕二十五有界の略。迷界を總括した名目で、四洲、四惡趣、四禪天、四無色天、六欲天、梵天、無想天、那含天をいふ。これ等の二十五界は因果相續して、果中未來の果を結ぶべき因果を具有するを以て二十五有界といふ。

二十五筋の琴の絲　二十五筋の琴の絲、結び契りし年の數、いざすががきて箱崎の、まつとし聞かば我も急がん（國性爺）

二十五絃琴に二十五歳をかけていうたのである。鑑起歸雁詩句に、「二十五絃彈二夜月、不レ勝三清怨一却飛來」。

***二十五の菩薩**　名香軒に薫ずれば、今日の三絃二十五の菩薩の歌かと疑はる（三世相）

(1)觀世音、(2)大勢至、(3)普賢、(4)藥王、(5)藥上、(6)法自在、(7)師子吼、(8)陀羅尼、(9)虛空藏、(10)德藏、(11)寶藏、(12)金光藏、(13)金剛藏、(14)光明王、(15)山海慧、(16)華嚴王、(17)藥寶王、(18)月光王、(19)日照王、(20)三昧王、(21)定自在王、(22)大自在王、(23)白象王、(24)大威德王、(25)無邊身、以上の二十五の菩薩を云ひ、阿彌陀佛の眷屬である。極樂に往生する者はその臨終に、阿彌陀如來が二十五菩薩を率ゐて來迎されるといふ。十往生經に、「若有三衆生、念二阿彌陀佛一願二往生一者、彼佛卽遣二十五菩薩一擁二護行者一、若行若坐若住若臥若晝若夜、一切時一切處、不レ令三惡鬼惡神得二其便一也」。

二十五の厄の年

「まことに今年は云云」を見よ。

二十三夜　卜庵が見えたら灸をせう、……、今日は二十三夜なれど一向宗はお構ひない（今宮）

二十三日は俗にいふ長病日の一で、灸・鍼などを行ふを忌む日である。

***二十八部衆**　觀音二十八部衆の金剛夜叉ともいひつべし（兼好）

(1)婆藪仙人、(2)大辯才天、(3)那羅延堅固、(4)密迹金剛、(5)大梵天、(6)帝釋天、(7)摩醯首羅、(8)東方天、(9)金色孔雀王、(10)增長天、(11)毗沙門天、(12)廣目天、(13)摩和羅天、(14)滿善車王、(15)神母天、(16)五部淨王、(17)難陀龍王、(18)迦樓羅王、(19)緊那羅王、(20)摩睺羅王、(21)阿修羅王、(22)金大王、(23)乾闥婆王、(24)沙迦羅王、(25)金毘羅王、(26)滿仙王、(27)散脂大王、(28)畢婆迦羅王、以上の二十八神をいひ、觀世音菩薩に侍寓するを以て觀音二十八部衆と稱す。其中の

密迹金剛を執金剛とも金剛夜叉とも稱し、寺院の門の兩側に立てる二王はこの神の像である。

にじようさぶつ 二乘作佛の鷲は無作三身の谷に轉り（百日曾我）

〔二乘作佛〕法華已前は佛の方便說である故、小乘教の分際なる聲聞と緣覺との二乘の作佛するを說かず、法華の會座に至つて二乘の作佛を說き、これに記莂を與へた。輔行・六に、「過尋二法華以前諸教、實無二乘作佛之文、以明二如來久成之說、故知並由レ帶二方便一故」。

二字を首に懸く 「二字」を見よ。

***にちる** サア證據を出せとにちければ（萬年草） お取次よいやうに賴み申すとにちかけける（百日曾我）

劫戾の義。ねちる。すねる。强請す。色道大鏡・態藝門に、「にちる。ねちるに同意、五音相通なり、物をねだる心なり」。

につけい 光の中より妙覺の如來の容貌ありありと拜まれ給ふと見えけるが、につけいより電光うつるとひとしく外道の書は皆灰燼と煙りゆき（用明天皇）

〔肉髻〕梵語、烏瑟尼沙（Usnisa）の譯である。頂髻または佛頂ともいひ、佛の三十二相（その條を見よ）の一で、佛の頂上に肉の隆起し髻の如くなれるものをいふ。

につけい 肉桂の香や花の香の、風に日覺ます西湖の八景（唐船噺）

〔肉桂〕「にくけい」の音便。支那原產の常綠喬木で高さ數丈に達す、葉は互生して長橢圓形で尖り、其質厚く光澤がある、花は小形綠黃色で聚繖花序に排列す、根及び莖の皮に香氣あり、乾かして藥用とす。

***につこらしい** おもだかが惡性故鼓の草を取返さん爲附いたりと、につこらしう口をしやべれ（天鼓）

につこらしい、鼻の先がひこひこする、未だに仇を仕足らいで、若君西國にまします故、此軍介を東へやりほつかりすかたんさせんとな（隅田川） 毎年京へ來る得意の萬歲が來て不思議立てたを、につこらしう嘘ついて往なせる事は往なせたが（大經師）

似付かはしい義。いかにも眞實らしい。さも誠らしい。「につこらしい、鼻の先がひこひこする」とは、「につこらしい嘘わいの、鼻の先がひこひこする」の意である。俚言集覽に「似つこらしい。雅言にニツカハシと云」。

日親樣 宗門なれば日親樣の御門で死なせて下さんせ（重井筒） 疱瘡した時日親樣へ願かけ、代代の念佛捨て百日法華になり（女殺）

日親上人は日蓮宗の高僧で、京都本法寺の開山である。應永年間に立正治國論を著し、將軍足利義敎を誡めて獄に投ぜられ、活火に燒ける鍋を頭に被らされたれども、屈せなかつたによつて冠（なかがり）鍋、日親上人といふ。「日親樣の櫛門」とあるは、大阪生玉中寺町正法寺の門をいふ。「日親樣へ願かけ」とあるは、正法寺の日親堂に願をかけたのである。正法寺は撫陽群談に「法華宗受不施派京本法寺末院ナリ、日親堂境內ニアリ」と見えてゐる。

につぱい 御當山に石碑を建て日牌を供へ申すにつき（萬年草）

〔日牌〕位牌の前に毎日物を供へることをいひ、其日牌料。

***日本一** 粟の飯とは日本一の醍醐味、御馳走に預りたし（最明寺殿）

案じた父樣の御機嫌日本一、お側離れず御介抱申しや（春庚申）

至極結構といふ程の意。謠曲・鉢の木に、「それこそ日本一のことにて候、賜はり候へ」。同・小袖曾我に「日本一の御きげんにて候」。巢林子作・丹波與作に、「膝なは何ぞ日本一の大井川」とあるは其條を見よ。

***にてん** 其時二天現はれ出で、薄雲を搖攪んで天上遙にあがりつつ（西王母） 十神降魔の力を合せ、二天四天の勇をかるとも此縛めを何とせん（唐船噺）

禪師坊二天四天の威をかつて組合うたり（會稽山）

〔二天〕梵天と帝釋天とを云ひ、或は日天と月天とを云ひ、または多聞天と持國天とを稱することもある。「四天」は、持國・增長・廣目・多聞の四天王をいふ。

二度の月 簷の燈籠二度の月、菊の節句や年の暮（用明天皇）

八月の十五夜と九月十三夜と兩度の月。

にはくなぎどり さてこそかの鶺領を庭くなぎ鳥、庭叩鳥、戀敎鳥ともいふぞとよ（振袖始）

鶺鴒の異名。按ずるに鶺鴒が尾を上下に振るによつて、庭にて陰莖を振る鳥の義に云うた稱である。「くなぐ」は玉莖をいひ、「くなぐ」は房事を云ふ。符谷望之云、「にはくなぐりはこの鳥庭にありて尾を搖し觸るによりて名づけたるなり、彼が尾を搖すことをくなくと云ふなり」。

***にはせん** この銀を此儘置けば揚屋の庭錢、ほこりになつてすたります（鑄門松）

〔庭錢〕遊客が妓樓に於て禮頭（はなし）に遣る錢をいふ。また紋日（もんび）などに遊女より妓樓の主人などに遣る錢をもいふ。庭錢は略して庭とばかりもいふ。西鶴置土產（元祿六年刊）に「まづ女郎へ長德寺二百、宿のかかに金子拾兩庭につかはるる」。好色文傳授（元祿十二年刊）卷五に「揚錢（にはせん）も一つにつかはし申上まゐらせ候」。原田光風撰、及瓜漫筆に「庭錢といふは江戶にて總花といふたぐひなり、定ありて太夫は百三十目、天神は五十目、端女郎は三十目なり、右庭錢は揚屋へ請取、女郎屋內男女、揚屋內男女、町町の用人、東口西口の門番までそれそれ配分すと聞けり」。「あげや」の條をも見よ。

にはだから 扇のかげや・庭寶、妹女郎・朋輩衆、からの鏡を鴛鴦のあひの枕に渡してたべ（三世相） 在所へ戻せ去なせとて、額に角も入れた者、丁稚小者をいふ如く、內の手代や庭寶の侮り者になし果て（卯月紅葉）

〔庭寶〕奴婢夫婦となつて出生して代々其家に仕へる者をいひ、庭子・家子の稱の類。

***にはたきどり** さてこそかの鶺鴒を庭くなぎ鳥、庭叩鳥、戀敎鳥ともいふぞとよ（振袖始）

〔庭叩鳥〕鶺鴒の異名。庭にて鶺鴒が尾を上下に振つて地を叩くことりの稱である。

***にはたづみ** 例へば日月のにはたづみに映りて光を增すとは妾が事（大織冠）

〔潦〕俄立水の義であらう。雨の降つたたまり水。雨が地上にたまつて流れる水。和名抄に、「唐韻云潦、音老、和名」と見えてゐる。「潦」は康熙字典に「潦（禮曲禮）水潦降、又

跡上流水也」と見えてゐる。萬葉集・卷二の歌に「庭多泉流涙」と見えてゐる。

にはとりあはせ 卯之助と云ふ十一になる友達と鶏合の友達喧嘩行し、熊野が鶏と股野が鶏勝負によつて嫁合すべし（本領曾我）

〔鶏合〕鶏を鬪はせて勝負する遊戯。鬪鶏。「とりあ」〔天和長八四季あそび（天和頃刊）所載〕はせ」ともいふ。日次紀事（延寶年中成）三月三日の條に、「禁裏清涼殿南階前有二鬪鶏、其鶏諸家中雲客被出之、仙納彌市頭」此事一決二勝負一、是事」とあれば、禁中でも行はれたものである。

本稱行

鶏鉾 長刀鉾の双先に打かち時の鶏鉾（堀川波鼓）

京都祇園會に鶏鉾の山車を引く。「きをんまつりのやまぼこ」を見よ。

***にばんばえ** 組下の二番ばえ 金田芝藏・岡軍右衛門（寄庚申）

〔二番生〕二番息子。次男。長男は家督を嗣ぎ、平侍の次男どもは弓組・鐵砲組などの組下として仕へる。

***にふちやう** 弘法大師御入定八百年此方の一山の大騒ぎ（萬年草）

〔入定〕禪定に入る義。入寂。心を一處に定めて身口惡の三業を止息するを云ふ。

二佛の中間 月山の端に二合半、物相頭の奴が聲、なまだはなまみだ南無阿彌陀佛南無阿彌陀、塀を見上げて高念佛、立留りては又念佛、これぞ二佛の中間なり（孕常盤）

〔億迦去〕億七千萬年の佛をいふ。但しここの文は、太刀の空靖を佩き物相頭の姿は中間と見えれども、稱名念佛を唱へるはなまいだ坊主、これぞ二物を二佛にいひかけて、二佛の中間としやれたのである。俚言集覽に「（狂歌咄）細川玄旨の召使ひける中間あり、長大に肥りて心は正直なりければ、異名を大佛と喚たまひ、常には庭の塵を拾ひ朝ぎよめしてよくつかはれしが、法師になりて侍らばやと望み申しけるに、許されて髪をそりたるが極めてにげなく見えしを、御前に召してかくぞ聞えける、大佛かしらをそりて又佛、これぞ二佛の中間の果」。謠曲・百萬に、「申すは恐れなれども、二佛の中間、我ら如きの迷ある道あきらめんあるじとて」。

***にふぶ** 備前國を安堵して、即ち入部の行列ゆゆしき弓馬のほまれかや（佐佐木）

〔入部〕諸侯等が知行所へはじめて赴くこと。入國。謠曲・藤戸に、「此浦の御主佐佐木殿の御入部にてあるぞ」。

入門 入門、難經、脾胃論（冷泉節）

醫學入門を云ふ、明李梴撰、漢方の醫書で日本版のものもある。

***にへどの** （用明天皇）

〔贄殿〕禁中内膳の中にあつて、諸國から奉れる魚鳥などを納めて料理した所。拾芥抄・中に、「贄殿。在二内膳中一、有二別當藏人・頭・納・大宰、及諸國所一進御贄納、備二供御一給料納、御厨子所也」。

にべる うらがやうな女ら、歌連歌にべる都人夢にも見やしめすまい（女護島）

にべ（鱈膠）を活かした語で、愛著する意であらう。薩摩國誹にこの語らしきものを思ひ當らない。

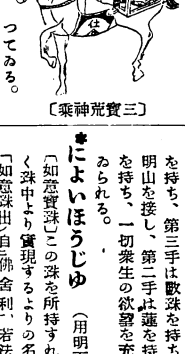
にほ 鴨の浮巣の浮きながら、下の通ひの絶えぬるも（伊豆日記）

〔鴨〕水鳥の名。短翼類に屬し、鴨に似て小さく、羽毛蒼黑で斑で、腹白く胸黄で紫斑あつて、嘴は堅く尖り、尾は短い。巧に遊泳し、又水中に潜む。かいつぶり。かいつむり。むぐり。この鳥は藻や葦の枯葉などを集めて、巣を水上に浮べて作る。世に之を浮巣といふ。夫木集に「唐崎や鴨の浮巣のいかにして、漂ひ渡る世を頼むらむ」。無名抄に「にほの巣をくふには、葦の萱藁を中にこめて、しかも枯小葉をくつろげてめぐりにくひたれば、潮みてば上へあがり、汐ひれば隨ひ下るなり」。

にほうくわうじん 遂に見馴れぬ二寶荒神乘合は、お供につきて行かひも（田村）

（好色五人女所載）

〔二寶荒神〕一馬の脊の兩側に櫓を置きて二人乘ること。この繪は三寶荒神なれども、古造紙挿・上卷に載ってゐる。



〔乘神荒寶三〕

鳰照るや 鴨照らや矢橋の浦の渡舟（蔭涼）

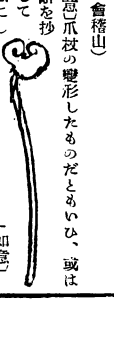
古來「にほとり（鴨鳥）や」を誤つたものであるといふ。ここの文はこれを近江の湖水の意に用ゐたのである。古事記に「遷二淡海之國一時、倭建命詔二美能宇美遷一云云」。

にやこい 下地がにやこい旦那様、こじたたるう仕掛けたらぽつかりと食付いて、田もやらう畦もやらうで、奥様はうつそり鼻明けてしまはんしよ（夕霧）

〔にやくわ〕弱氣の義であらう。女などに對して情にもろきをいふ。柔和で情に動かされ易い。「にやける」「にやつく」などはこれと同類語である。

によい 御手の如意は鞭となり（會稽山）

〔如意〕爪杖の變形したものだともいひ、或は文辭を抄錄して備忘にしたものだともいふ。古來講者僧侶の手に執るもので、竹または木で作り靈形に柄ある物。



〔如意〕

***によいくわんおん** 如意觀音と顯はれ光を放つて失せ給ふ（鰤丸）

「如意輪觀世音」の略。六觀音の一で、六臂を有し、右第一手は頰杖を突き、第二手は如意珠を持ち、第三手は數珠を持ち、左第一手は光明山を接し、第二手は蓮を持ち、第三手は輪を持ち、一切衆生の欲望を充たすべく努めてゐられる。

***によいほうじゆ** （用明天皇）（釋迦）

〔如意寶珠〕この珠を所持すれば、所願意の如く珠中より實現するよりの名。大智度論に、「如意珠出」自二佛舍利・若法沒盡時話舍利皆變二如意珠一」。「無熊の如意寶珠」をも見よ。

***にようご** 女子と生れしこの因果、女御更衣になるとても（淀鯉）

〔女御〕延喜式によれば、夫人の下で待遇は嬪と同樣であつたが、漸次地位高まりて攝關大臣の女を女御として皇后に立たれるやうになつた。また女御でなくても君の寵愛厚きによつて女御と稱したこともあり、また上皇・皇太子の妃を女御と稱したこともある。

***にようばう** 女房限つてこの文見

せず、我一人披見して起請共に火に入れる（天網島）
〔女房〕女が宮仕へして房を持つ者の義、禁中の宮女、貴族の侍女をいひ、後世轉じて平人の妻をいふ。「女房限つここの文見せず」とは、互に隠す所なき妻にも、特にこの文は見せることを及ぼさないで極秘にするとの意。

にようはち 「ねうはち」を見よ。

によさんのみや 唐猫が……、ころり炬燵にしなだれて、懐くも己が戀ならん、それは昔の女三の宮、これはおさんの當世女（大經師）
〔女三宮〕源氏物語に見える人物であつて、朱雀院の第三皇女である。源氏物語・若菜の巻上に、唐猫が簾ノ外に飛出る勢に、簾ノ動いた間から中に居た女三の宮の美貌を柏木の君が一瞥してより、深く戀慕の思に胸を焦し、若菜の巻下では、柏木の君と女三の宮と遂に情交を結び、女三の宮懷妊の身となり、これより悲劇を生むに至るを記してある。

***によじゆ** 京の御所より女嬬かお末か一両人呼び申さんと申上ぐれば（酒呑童子）
〔女嬬〕往昔内侍司に屬し、掃除・點燈などのことを司つた女官。

***によだう** はて立派な腰のまはり、衆道女道どちらも好物（國八州）
〔女道〕男色の道を衆道といふに對して、女色の道を女道といふ。好色五人女・巻三に、「衆道女道を晝夜のわかちもなく、さまざま遊興つきて」。

***によにやく** 女若二つの戀草を飼に飼うたる月毛の駒（鎧襷三）
〔女若〕女と若衆、即ち女道と衆道。

***によふ** 種直は五臓悩亂するやらん、堂の内にてによふ音さも堪へ難く聞ゆれば（大原問答）
〔呻吟〕うめく。うなる。宇治拾遺・六に「或は死に、或はにようふ弊す」。徒然草・第八十七段に、「具覺坊は梶原ににようひ臥したるを」。現今も福山地方では、痛みに堪へでうなるを「にようふ」といつてゐる。（序云、この語古來「にようぶ」と「ふ」を濁つて書いてもある）、

によぼく 布衣・如木・隨筆・帶刀・兵仗・弓箭を帶し遠侍に並居たり（本領曾我）
〔如木〕麻布の白張の衣を著、履・奈などを持つて供をする賤者をいふ。如木はもと麻布をこはく張つて木の如くなれる白張衣をいふ。轉じてその衣を着る者の稱になつたのである。貞丈雜記・巻之四、官位之部に、「如木と云ふはいやしき者也、白張を著て公家の供をする者也、履奈などを持つ役也、白張と云ふは白布の狩衣也、如木退紅と云ふ事義教公御元服記にあり。（白張はこはばりて木の如しといふ心にて如木といふとぞ）」。

によほふ 菱屋介五郎は如法なる氣も丸額にこやかに（今宮） 一座遊はによほふめく（女殺）
〔如法〕尋常の義。轉じて柔和、柔順の意にいふ。源平盛衰記・巻十九、佐佐木馬を取り下向の條に「曉は守山を立ち野洲の河原に出でぬ、如法曉のことなれば旅人も未だ見ざりけるに」。貞丈雜記・巻十五、言語之部に、「如法といふは尋常と云ふに同じ」。俚言集覽に、「如法。本繻徒の行狀のよきを云、轉じて俗の柔和なるを云」。（「女殺油地獄（竹本筑後掾直傳、山本九兵衛版七行本）下之巻のここの文に、「あふぎで忍ぶちやち屋のきやく、一座あそびは女方めく、かたでかぜ切からぞめき」とある、女方を女房とするはいかが）。

にれをかむ 野飼の牛むつくと起きて駈け隔たり、にれをかみ立て角を振り（用明天皇）
〔齶〕「にげかむ」ともいふ。牛などが食物を嚙みて嚥下した後に、又口中に吐出して再び咀嚼するをいふ。反芻する。和名抄に、「齶。爾雅集注云、獸吞嚙嚥、反出而嚼、逐介加无」。

二六五七 鞍下沓裏口心二六五七の駿馬の相（源義經將棊經）
二六の十二と、五七の三十五とを加へた、馬のたけ四尺七寸をいふか。

にんが 大海原の王子として生年二十三歳、人我の相面にあらはれ（嵯峨天皇）
〔人我〕他人と自身を相對して人我といふ、人我の見としりして我慢偏執の心もあり、愛欲著心も生じるのである。人身には常一の主宰者あると因執するを人我の相といふ。六祖壇經に、「無二人我貢高愛慢執著、爲離欲尊」。

にんぎよ 麒麟の粕漬、薄鹽の人魚、龍門の生鯉まで（大繼冠）
〔人魚〕魚身で人面の者。和名抄に、「人魚一名鮫魚、魚身人面者也、山海經注云、聲如二小兒啼一、故名レ之」とありて、箋注倭名類聚抄に、「按源君所レ擧人魚、疑是海人魚、非二陵鯉一又非二鯨魚一也、史記正義又引異物志云、人魚似二人形一、長三尺餘、不レ堪レ食、皮利二於鮫魚一、項上有二小穿一、氣從二中出一、出二東海一者蓋是、云云」。

にんくわい 我十善の位に即かば名虎を攝政關白、有常も任槐（升筒）
高房卿も任槐あり、此安盛も鎭守府の將軍（酒呑童子）
〔任槐〕丞相大臣に任ずることを云ふ。周時代に外朝に三槐を栽ゑて三公その下に班列せしにより、三槐又槐位を三公の義とす。周禮・周官に、「面三槐三公位焉」。

***にんじん** 人參の百服餘りも飲んだ故（氷期日）
〔人參〕草である。朝鮮人參で人の形せるものは最上の靈藥である。藥用人參の原種は朝鮮の山谷小笹叢中に自生し、その處は虎の出没するが故に、採掘者は夜間火を焚いて毒損せぬやう了覺に採收するのである。圖經に、「初生小者一莖兩葉、深生二四枝、各五葉、狀類人、兩莖人土如レ脚、兩小莖垂下如レ手、中有二一身、首有二五葉、象二人有レ髮、故曰二人參一」。「えびでの人參」を見よ。

にんじん この艾の威德には、時を擇ばず日を嫌はず、思ひ立つ日に人神なし（枕狩）
〔人神〕俚言集覽に、「人神〃（時瘧經驗）逐日人神所在、不レ宜二灸針一、注、人神者六氣陰陽之衰裏也、忌二灸針一」。

***にんにく** 柔和の相好・忍辱の笑の眉（用明天皇） 忍辱・柔和の天人天女のかんばせありあり（蛙合戰） 御法の聲を聞く時は惡鬼心を和らげ、にんにく慈悲の姿にて（女夫池）
〔忍辱〕毀罵惱害に遭つても安忍して悲恨なきを云ふ。法華次第に、「内心能安二忍外所一辱境、故名二忍辱一」。

にんみやく にんみやく筋を四つ五つ聲をかけて刺し通し（卯月潤色）
〔任脈〕會陰から腹の中央を通る血脈。和漢三才圖會巻十一、經絡部に、「任脈＝任之爲二言妊也、行二腹部中行、爲二婦人生養之本、奇經之一也、任脈與二督脈一二源而二岐、（督則由二會陰一而行レ背、任則由二會陰一而行レ腹）、夫人身之有二任督、猶二天地之有二子午一也」。

ぬ

＊ぬえこどり（國性爺）
〔鵺子鳥〕「ぬえ」（鵺また鵺）ともいふ。和名抄に、「唐韻云、鵺恠鳥也、漢語抄云、沼江」。字鏡に、「鵺、奴江」。貝原篤信は、「鵺は鬼つぐみといふ、常のつぐみに三倍ほど大なり、星おほし」と云ふ。平家物語巻四・鵺の條に、源三位頼政が恠物を射取つたことを記して、「かしらは猿、むくろは狸、尾はくちなは、手足は虎の如くにて、鳴く聲ぬえにぞ似たりける」、とあるによりて一種の怪物に取扱はれてもゐる。

＊ぬかづく　櫛田の神にぬかづけば（蛙合戦）
額突くの義。叩頭す。禮拜す。

＊ぬかみそ　若衆と糠味噌の味は屋敷に極まりし（宵庚申）　糠味噌汁の御恩にかへたお若衆、ここで死なれば心中が見えまらせぬ（宵庚申）
武家の奉公爲からせば糠味噌汁の花散りて、近年高野に相勤め小姓廻しは致せしが（薩摩歌）　あつちはかうのもの、こつちは糠味噌、切らるるは膳の箸、外に道はあるまいか（聖徳太子）
〔糠味噌〕往時武士は粗食に甘んじたもので、殊に舎人・奴の輩は常食に麥飯に糠味噌汁を啜り、奴の給料は二合半の切米である。「糠味噌汁の御恩」とは、武家の主君の御恩の意。遂生雑記・巻上に、「奴加美曾或作三糟糠一、未レ詳二本説一、以二米粃一和二入麹豆鹽一造成者也」。

ぬきす　あくれば掬ぶ谷水を心ばかりの湯化粧と、ぬきすをだにも參らせず（十二段）
〔貫簀〕丸く削つた竹で編んだ簀で、手洗水の飛散らぬ爲に盥の上に掛置いたもの。伊勢物語・二十六段に、「女の親腹立ちて、手洗ふ所に貫簀をとりて投棄てければ」。

＊ぬく　よつぼどあがけよ其處なぬくめ、見ん事男の敷に入りながら、江戸の供さへ得しをらず（鑓樫三）
〔温〕ぬく太郎ともいひ、痴漢の意。馬鹿。但言集覧に「ぬく太郎＝温暾湯の意也、馬鹿なり云」。

ぬくぬく　和藤内が月代首提げて來らんと、廣言吐きし某が、一太刀も合はせず矢の一本も放さず、ぬくぬくと味方せば（國性爺）　ようもようも此母をぬくぬくとだましたな（女殺）
〔温温〕ぐうぐうしい。ぐぶとい。「あたたかな」を參照せよ。

ぬぐひうるし　心はさつぱり拭漆の刀懸（大經師）
〔拭漆〕さつと拭うたやうにかけた漆塗。

ぬくわか　生ぬるいぬくわか、鑓の柄切つて切折れと喚いてかかるな（蛙合戦）
〔温若〕「ぬく」は其條を見よ。白痴の若者の義であつて、「ぬく太郎」など云ふ類である。痴漢。人を罵つていふ。この語天正頃よりの語であらう。淺井三代記、大橋安藝守生害のことを云へる條に、「我この屋敷にとり籠り、久政のぬくわかに目をさますべきは易けれど」。

＊ぬけさんぐう　契りそめしは一昨昨年、抜參宮の道連れに（丹波興作）
〔抜參宮〕「ぬけまゐり」ともいひ、親や主人に祕して、こつそりと伊勢太神宮に參詣するをいふ。抜參宮の最も流行したのは寶永二、三年である。巣林子のここの文に「一昨昨年抜參宮」といへるは、寶永二年の抜參宮を當込んだものであらう。日次紀事（延寶年中成）二月の條に「自二今月一至二四月一伊勢參宮徒多、其間爲二人臣子一者、不レ告二君父一而參詣者、是謂二脱參一」。博多小女郎波枕に「抜參宮の頭字が耳に留まる神心」とあり、この文意は、「抜參宮の頭字、抜」は「抜荷商ひ」（密貿易）の頭字「抜」と同じなるによつて、耳に留まつて氣に懸り、神慮によつて己が犯せる抜荷商ひの罪科の繩目の恥辱を免かれるやう、守護し給へと祈る意。

ぬけぬけ　こな様はなう侍のぬけぬけとよう嘘をつかしやんす（鑓樫三）
〔抜抜〕巧言を以て言ひ抜ける貌。但言集覧に、「人を欺くをヌクと云、人に欺むかるるをヌカるると云」。

＊ぬさ　この度はぬさもとりあへず手向山（天智天皇）
〔幣〕御幣をいふ。紙・麻・帛・木綿などを切つて神に捧げるもの。古今集・菅公の歌に、「この度はぬさもとりあへず手向山、紅葉の錦神のまにまに」。

ぬし　煙管屋・ぬし屋・檜物屋・指物屋（用明天皇）
〔ぬりし（塗師）の略。下學集・上、人倫門に、「塗師人」。

ぬしづく　この伴左衞門に緣邊し、七百町をぬしづかんとあてはめて置いたもの（反魂香）
〔主附〕主たる位置にありつく。持主となる。

ぬすみかやき　盗みかやきの身ではなし（曾根崎）
盗み家燒、即ち盗賊放火犯をいふ。「のたをうつ」を見よ。

ぬたうつ
ぬための鏑　ぬための鏑差添へて、村重籐の弓持つて（加增曾我）
鹿角にて作つた鏑矢をいふ。「ぬた」は鹿の角の義。和名抄に、（貞丈雜記所載）「鈔、沼太、波太、角上浪皮也」。平家物語・巻十一、那須與一の條に、「ぬための鏑をそぎし添へたる」。

ぬつけり　ぬつけりとわし等をだまして（蛙合戦）　あのぬつけりとした顔わいの「宵庚申」
とぼみなく平氣な樣にいふ。巣林子作・日本振袖始に、「歌年ぬつぽりと親を能うだましたなあ」。同・曾根崎心中に、「そなたを見るも恨めしい、あの正直な德兵衞めをば、ぬつぺりとした顔をしてどのやうにだましたやら」。生玉心中に、「際の日に商人の店を捨て、何處へぬつくり這入つてゐ」とある、「ぬつぽり」「ぬつぺり」「ぬつくり」も「ぬつけり」と同緣の話である。

＊ぬはい　六字づめの念佛、それも當世粹になり、それを立つる坊主衆もぬはいぬはいぬはいだぬはいだ、まだ洒落て後にはぬいぬいなどやる世の中（千疋犬）
六字名號の南無阿彌陀佛の約説。

ぬめ　店の帳面皆ぬめりんず（氷朔日）
〔紈〕光澤ある一種の絹布。萬金產業袋・四、衣